

# 生き生き津高

Vol.21



青空図書館（昼休みに定期的に開催）

三重県立津高等学校 2020. 3

## 1. 学校行事や委員会活動紹介

学校長の言葉	2
スクールライフ	3
生徒会活動・生徒会行事	5
修学旅行	8
東京大学キャンパスツアー	10
マレーシア研修	12
探究活動	14
キャリアプロジェクト「西村ゼミ」	16

## 2. 個人活動紹介

少林寺拳法	17
なぎなた	18
ボウリング	19
健康に関する作文	20
読書感想文	22
読書感想画	27
ヨット	29

# そこは宇宙。－あなたの夢の出発点－

三重県立津高等学校

校長 大川 暢彦

「生き生き津高」は、本校の学校行事や生徒会活動、部活動等、本校生徒の一年の活動記録をまとめたものです。津高生にとっては、津高文化を振り返ることができる記録集であり、中学生の皆さんには親しみやすい学校案内としての役割を果たしています。本校公式ホームページでも閲覧可能です。

津高校は、明治13年に旧津藩校「有造館」を譲り受け、津中学校として開校し、今年度創立140周年を迎える三重県で最も歴史と伝統がある県立高校です。本校は、『『自主・自律』の校訓のもと、高い知性と教養を持ったリーダーが育つ学校』を目指し、日々教育活動を展開しています。

また昨年度、文部科学省から三重県で唯一3期目のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）にも指定され、大学や研究機関、企業と連携し、すべての生徒に探究的な学びも推進しています。SSHの活動等を通じて、探究心に溢れ、創造性・協働性・課題解決能力等の資質・能力を高め、国際社会で活躍できる人材に育ててほしいと思っています。

昨年度の学校案内ポスター（下）は1年生の生徒のデザインによるものです。「そこは宇宙。－あなたの夢の出発点－」津高校は宇宙、津高生は無数のきらめく星たち。津高生は、学習はもちろん、学校行事、SSH活動、生徒会活動、部活動等、様々な活動に積極的かつ主体的に取り組んでいます。津高という広い宇宙の空間で、ひとり一人がそれぞれの個性や才能の違いを認め合い、尊重し合い、切磋琢磨する中で、自分がやりたいことに気づき、自分を高め、夢をみつけていきます。本冊子において、津高生の生き生きとした姿をご覧いただき、津高の宇宙をお確かめください。





# School Life

## 前期

4月

始業式・着任式・入学式、HR写真撮影  
1年オリエンテーション  
定期健康診断、面談週間、遠足  
縦割りディスカッション、全学年確認テスト

5月

前期生徒会役員選挙、定期健康診断  
県総体

6月

中間考査、教育実習  
東海総体、2年生修学旅行  
1・3年校内模試

7月

2年校内模試、夏季レク大会  
保護者会、「自分探し」、夏季課外

8月

夏季課外、「自分探し」  
全学年校内模試  
中学生対象津高入門講座・見学会

9月

文化祭、期末考査



# School Life

## 後期



芸術鑑賞、体育祭  
後期始業式、防災訓練  
面談週間  
後期生徒会役員選挙

10月

創立記念日(1日)  
3年校内模試

11月

1・2年中間考査、3年学年末考査  
3年特編授業

12月

1・2年校内模試  
大学入学共通テスト

1月

SSH 研究成果発表会  
国公立大学前期試験  
卒業を祝う会(同窓会)

2月

卒業式、1・2年学年末考査  
国公立大学後期試験  
春季レク大会、修了式

3月



## 「生徒会長になって」

### 1年 池山 幸音（附属中学校）

津高校では「自主・自律」のもとに有志の生徒が中心となり生徒会活動を行っています。活動内容は主に体育祭や文化祭、レク大などの行事の企画・運営です。会長はその行事で挨拶をしたり、対面式などの準備をします。他にも外務活動にも力を入れていて、東海地方や近畿地方、全国の生徒会連盟の取り組みに参加しています。

私は今まで生徒会というものに入ることがなく、もちろん会長という役割も初めてしました。だから、先ほどまで書いてきた活動内容もわからないことが多く、不安なことだらけでした。そんな時に、同じ生徒会の友だちや先輩方、先生方に助けてもらうことでなんとか仕事をこなしていくことができました。私は生徒会活動を通して、人とのつながりを大切にしたいと思いました。また、本音で言い合って高め合える「津高の生徒会」を引き継いで生徒会活動をがんばろうと思います。



対面式



部紹介

## 「レク大担当の役割について」

### 1年 上中 咲空（南が丘中学校）

勉強に追われ楽しいことに飢えている津高生が最も楽しみにしている行事の1つがレクリエーション大会、通称「レク大」です。レク大は春と夏に3日間ずつ行われます。この3日間は授業がないので、生徒全員が本気でこのレク大に臨みます。

行われる種目はスポーツ系（バスケ、サッカーなど）と、テーブルゲーム系（オセロ、大富豪など）があります。さらに見どころは、本気の戦いにふさわしい、クラスメイトの本気の応援です。サッカーでシュートが決まったら「キャー」、オセロで角を取ったら「キャー」という具合です。

最後にレク大担当の仕事についてですが、主な仕事は選手登録、会場のセッティング、審判などです。当日は動き回ったりして忙しいですが、自分の競技の時は抜けても大丈夫です。生徒の期待が高いだけあってやりがいのある楽しい仕事です。



バレーボールの試合



オセロの試合

## 「体育祭担当の活動について」

### 1年 藤原 優菜（道後中学校）

前期半年間の津高生活を締めくくるのは、終業式でも授業でもなく、なんと体育祭。津高の学校行事では唯一の、3学年縦割り活動となっています。学年の垣根を越え、津高生全員で大いに盛り上がり、各々の高校人生に彩りを添える、まさに「青春の1ページ」です。

競技の内訳は、リレーや綱引きなど定番のものから、しっぽ取りやキャッチングホイールなどユニークなものまで様々です。中でも「240の瞳」は特に必見です。9団それぞれが120人の団体演技を披露し、パフォーマンスバトルをくり広げます。各団の独創性が輝く、見応えのある競技です。

生徒会体育祭担当は、全員で協力しながら本番に向けて準備を進めます。直前期や当日は本当に忙しく大変ですが、全行程が終了すると達成感や充実感でいっぱいになります。



体育祭開会式



240の瞳

# 「文化祭担当の役割について」

1年 山本 真緒（南が丘中学校）

文化祭は2日間行われる津高の一大行事です。初日は三重県総合文化センターで行われ（非公開）、2日目は本校で行われます（公開）。私たち生徒会の文化祭担当はその企画・運営を担当します。

1日目の非公開の部は文化系クラブが発表し、また、津高独自の出し物である教員劇や有志発表もあり大いに盛り上がります。

2日目の一般公開の部も、クラスのみならず一致団結して模擬店を開いたり、1日目で発表していない文化系クラブも発表したりし、老若男女を問わず沢山の人が訪れます。私たち生徒会は、より多くの人に楽しんでもらえるように各クラスのチェックやパンフレットの作製・配布等を行い、企画を支える重要な役割を担います。

生徒会は文化祭の1日目、2日目ともに大変な仕事ばかりですが、成し遂げた後には大きな達成感があり、やりがいもあります。



吹奏楽部の発表（非公開）



模擬店（一般公開）



# 「津高校修学旅行2019ーみんなで無事に帰るー」

修学旅行委員長 2年 小津 七海 (香海中)

私たち修学旅行委員は各クラス2人ずつ担当となり活動しました。1学年の終わり頃から活動は開始し、観光コースを学年集会でパワーポイントを使いプレゼントしたり、クラス内での話し合いの進行、修学旅行2日目の夜の有志の司会・盛り上げ役など数えきれないほどの活動をしました。どのような行程にするとみんなが楽しめるだろうか、退屈しないだろうかなどを考え、意見を出し合い協力し、日を迫る事に確定させていきました。3泊4日という長い時間の中で不安もありましたが、2学年みんなの笑顔を見るとかき消されました。中学校とは違い、1から自分たちで作る修学旅行だったので行程も複雑で把握しきれない部分も若干ありましたが、委員のみんなや、2学年のみんな、先生方、旅行会社の方の力のおかげで無事に終わることができ、素敵な思い出をみんなと作ることができたと思います。修学旅行後、「戻りたい!」「すごい楽しかったし、充実した!」という言葉があちこちで飛び交っていて、嬉しくなったのと同時に修学旅行委員をして良かったと達成感でいっぱいになりました。修学旅行は1人では作れないし、たくさんの人の力や思いがあってこそ素晴らしいものになるということを感じました。私は高校に入ってから大きな役割をしたことがなかったので、修学旅行委員という大事な仕事をやり遂げることが出来るのだろうかと不安になったこともありましたが、委員のみんなが声をかけてくれたり、クラスメイトが助けてくれたおかげで楽しく活動でき、私の高校生活においてとても貴重な経験になりました。私は今回修学旅行委員という仕事を通して、人前に出て何かを計画し進めていくことの難しさや楽しさを実感する



ことができました。自分たちで修学旅行を作るという伝統がある津高校だったからこそ、忘れられない、1人1人の最高の思い出を作ることができたと感じています。今後もこの良き伝統が続いていくことを願っています。

日次	月日	行程												
1 日目	6/18 (火)	津高校 → → → 中部国際空港 → → → → 新千歳空港 → → 登別地獄谷 → → → 洞爺湖遊覧船 → → サイロ展望台 → → ニセコ(泊) 【グリーソリーフニセコビレッジ】												
2 日目	6/19 (水)	ホテル → → → → ニセコ体験学習 → → → → ホテル → → → → 小樽市内班別研修 → → → 札幌(泊) 【シヤトレセカトーキングダムサッポロ】												
3 日目	6/20 (木)	ホテル → 北海道内希望別研修 → 札幌・アサヒビール園 → 札幌(泊) 【ホテルモントレ札幌】												
		<table border="1"> <thead> <tr> <th>コース</th> <th>行程</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> <b>1.ダッチオーブン</b>            ①②③号車            TC 坂部            143人+先生5名            +看護師1名         </td> <td>           朝食 6:15            ホテル → → → → <b>ダッチオーブンで作るチキングリル</b> (昼食) → → → → <b>午後然別湖体験 (カヌー・マウンテンバイク・乳絞り)</b> → → → → 夕食会場            7:15 10:45 雨天決行 13:00 13:15 雨天決行 15:30 19:00頃         </td> </tr> <tr> <td> <b>3.札幌滝</b>            ④⑤号車            TC 伊藤            94人+先生3名            +看護師1名         </td> <td>           朝食 7:00            ホテル → → → → <b>大倉山ジャンプ競技場</b> → → → → <b>サッポロファクトリー</b> → → → → <b>ノースサファリサッポロ</b> → → → → <b>羊ヶ丘展望台</b> → → → → 夕食会場            8:30 9:30 11:00 11:45 13:30 14:30 16:30 17:15 18:00 18:30頃            【昼食:SEASONS フォーエ】         </td> </tr> <tr> <td> <b>4.富良野体験</b>            ⑥号車            TC 上村            31人+先生2名         </td> <td>           ホテル → → → → <b>富良野チーズ工房</b> → → → → <b>ニュー富良野</b> (昼食) → → → → <b>富良野:ファーム富田</b> → → → → <b>アンパンマンギャラリー</b> → → → → 夕食会場            7:45 10:15 12:00 12:10 13:30 13:35 14:30 15:10 15:40 18:30頃            ★バター作りアイス作り ★昼食後「ボブラファーム」にバス移動し、スイーツ         </td> </tr> <tr> <td> <b>5.富良野観光</b>            ⑦号車            TC 櫻井            23人+先生2名         </td> <td>           ホテル → → → → <b>富良野でしか味わえない景色</b> → → → → <b>富良野ラテール</b> (昼食) → → → → <b>富良野:ファーム富田</b> → → → → <b>三笠鉄道村</b> → → → → 夕食会場            7:30 10:40 11:10 11:50 12:50 13:00 14:00 15:40 17:10 18:30頃            ★昼食後「ボブラファーム」にてスイーツ ★SL乗車体験         </td> </tr> <tr> <td> <b>6.旭山動物園</b>            ⑧⑨号車            TC 木村            69人+先生3名            +写真屋1名         </td> <td>           ホテル → → → → <b>旭山動物園</b> (昼食:索門ガーデンテラスライオン) → → → → <b>富良野:ファーム富田</b> → → → → 夕食会場            8:00 10:30 13:30 14:45 16:00 18:30頃            ★見学・昼食(2回転制)         </td> </tr> </tbody> </table>	コース	行程	<b>1.ダッチオーブン</b> ①②③号車 TC 坂部 143人+先生5名 +看護師1名	朝食 6:15 ホテル → → → → <b>ダッチオーブンで作るチキングリル</b> (昼食) → → → → <b>午後然別湖体験 (カヌー・マウンテンバイク・乳絞り)</b> → → → → 夕食会場 7:15 10:45 雨天決行 13:00 13:15 雨天決行 15:30 19:00頃	<b>3.札幌滝</b> ④⑤号車 TC 伊藤 94人+先生3名 +看護師1名	朝食 7:00 ホテル → → → → <b>大倉山ジャンプ競技場</b> → → → → <b>サッポロファクトリー</b> → → → → <b>ノースサファリサッポロ</b> → → → → <b>羊ヶ丘展望台</b> → → → → 夕食会場 8:30 9:30 11:00 11:45 13:30 14:30 16:30 17:15 18:00 18:30頃 【昼食:SEASONS フォーエ】	<b>4.富良野体験</b> ⑥号車 TC 上村 31人+先生2名	ホテル → → → → <b>富良野チーズ工房</b> → → → → <b>ニュー富良野</b> (昼食) → → → → <b>富良野:ファーム富田</b> → → → → <b>アンパンマンギャラリー</b> → → → → 夕食会場 7:45 10:15 12:00 12:10 13:30 13:35 14:30 15:10 15:40 18:30頃 ★バター作りアイス作り ★昼食後「ボブラファーム」にバス移動し、スイーツ	<b>5.富良野観光</b> ⑦号車 TC 櫻井 23人+先生2名	ホテル → → → → <b>富良野でしか味わえない景色</b> → → → → <b>富良野ラテール</b> (昼食) → → → → <b>富良野:ファーム富田</b> → → → → <b>三笠鉄道村</b> → → → → 夕食会場 7:30 10:40 11:10 11:50 12:50 13:00 14:00 15:40 17:10 18:30頃 ★昼食後「ボブラファーム」にてスイーツ ★SL乗車体験	<b>6.旭山動物園</b> ⑧⑨号車 TC 木村 69人+先生3名 +写真屋1名	ホテル → → → → <b>旭山動物園</b> (昼食:索門ガーデンテラスライオン) → → → → <b>富良野:ファーム富田</b> → → → → 夕食会場 8:00 10:30 13:30 14:45 16:00 18:30頃 ★見学・昼食(2回転制)
コース	行程													
<b>1.ダッチオーブン</b> ①②③号車 TC 坂部 143人+先生5名 +看護師1名	朝食 6:15 ホテル → → → → <b>ダッチオーブンで作るチキングリル</b> (昼食) → → → → <b>午後然別湖体験 (カヌー・マウンテンバイク・乳絞り)</b> → → → → 夕食会場 7:15 10:45 雨天決行 13:00 13:15 雨天決行 15:30 19:00頃													
<b>3.札幌滝</b> ④⑤号車 TC 伊藤 94人+先生3名 +看護師1名	朝食 7:00 ホテル → → → → <b>大倉山ジャンプ競技場</b> → → → → <b>サッポロファクトリー</b> → → → → <b>ノースサファリサッポロ</b> → → → → <b>羊ヶ丘展望台</b> → → → → 夕食会場 8:30 9:30 11:00 11:45 13:30 14:30 16:30 17:15 18:00 18:30頃 【昼食:SEASONS フォーエ】													
<b>4.富良野体験</b> ⑥号車 TC 上村 31人+先生2名	ホテル → → → → <b>富良野チーズ工房</b> → → → → <b>ニュー富良野</b> (昼食) → → → → <b>富良野:ファーム富田</b> → → → → <b>アンパンマンギャラリー</b> → → → → 夕食会場 7:45 10:15 12:00 12:10 13:30 13:35 14:30 15:10 15:40 18:30頃 ★バター作りアイス作り ★昼食後「ボブラファーム」にバス移動し、スイーツ													
<b>5.富良野観光</b> ⑦号車 TC 櫻井 23人+先生2名	ホテル → → → → <b>富良野でしか味わえない景色</b> → → → → <b>富良野ラテール</b> (昼食) → → → → <b>富良野:ファーム富田</b> → → → → <b>三笠鉄道村</b> → → → → 夕食会場 7:30 10:40 11:10 11:50 12:50 13:00 14:00 15:40 17:10 18:30頃 ★昼食後「ボブラファーム」にてスイーツ ★SL乗車体験													
<b>6.旭山動物園</b> ⑧⑨号車 TC 木村 69人+先生3名 +写真屋1名	ホテル → → → → <b>旭山動物園</b> (昼食:索門ガーデンテラスライオン) → → → → <b>富良野:ファーム富田</b> → → → → 夕食会場 8:00 10:30 13:30 14:45 16:00 18:30頃 ★見学・昼食(2回転制)													
4 日目	6/21 (金)	ホテル → → → → 札幌市内班別自由散策 → → → 新千歳空港自由散策 → → → → 新千歳空港 → → → 中部国際空港 → → → 津高校												



# 東大キャンパスツアー

2019年7月17日～18日

## 目的

- ・ 東京大学を実際に訪れ、研修することで、大学での学びを知り、学問への興味関心を高める。
- ・ 津高出身の東大生から、高校での学習や受験勉強、大学生活について話を聞き、今後の生活をより充実させる。
- ・ 同じ津高生の仲間と積極的にコミュニケーションをとり、互いに切磋琢磨する存在となる。

参加生徒 1年生 34名



## 研修内容

7月17日(水)

### ①医学部コース

「学際科学としての栄養学の基礎知識～予防医学の魅力とたいせつさ～」

佐々木 敏先生（大学院医学系医学科公共健康医学専攻社会予防疫学分野教授 本校OB）による講義の後、研究室を見学し、実際に食生活のアンケートによって個人のデータを出してもらった。

### ②工学部コース

「ナノテクノロジーの将来」

幾原 雄一先生（大学院工学研究科総合研究機構 ナノ工学研究センター長 本校OB）による講義の後、グループに分かれて巨大電子顕微鏡を使った実習、学生との懇談会等の研修を行った。



### ③現役東大生（卒業生を含む）との懇談会

東大近くの宿泊先にて、本校OBの東大生と交流した。高校時代の学習方法や東大での学生生活の実態などを伺い、積極的に質問して様々なアドバイスをいただいた有意義な時間であった。

7月18日（木）

#### 「TOKYO GLOBAL GATEWAY」

セッション1では「ニュース番組を作ろう」と「Sustainable Development Goals 地球の17の目標を考えよう」というテーマでグループに分かれ、作品を作り上げてプレゼンテーションした。セッション2ではトラベルゾーンにおいて、薬局と旅行代理店、ファーストフード店でのやりとりを行った。実際の場面設定のなか、英語のみを使う刺激的な体験となった。

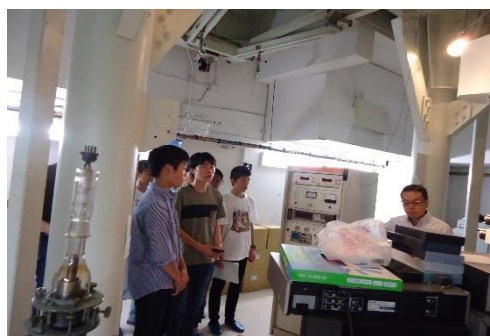


#### 参加した生徒の感想



①医者と言えば治すことをイメージするけれど、予防するドクターという存在もあって、医者という職業に対しての視野が広がった。ドラマなどで見る絶対に失敗しないドクターよりも、病気を予防する方法を教えるドクターの方が人の命を救えるということについても予想外だった。病気を治していくドクターの裏で、病気の予防方法を教えに回っているドクターはかっこいいと思う。佐々木先生のような医者は絶対必要であると思った。

②興味深いことだらけだった。高校の勉強がどのように繋がっていくかが分かった。工学部は自分の研究結果が多くの人々の生活に、より早く大きく影響すると感じた。3種の顕微鏡の見学では操作体験もできたりと、とても貴重な経験となった。工学部と理学部の違いも明確に知ることができた。今までの発明品のような「偶然」ではなく、論理づけた「予測」をすることが大切だという内容はとても納得した。



③東大生はもっと特別なことを勉強し、高校時代からガッツリ勉強ばかりしているイメージであったが、そうではなく、今私たちが取り組んでいる課題を2回、3回反復したり、丁寧にしたりしていて、いい意味で裏切られた。ただ機械的に覚えるんじゃなくて、もっと深く考えることが大切だと分かった。「勉強は時間よりも質である」という元バスケット部の先輩の言葉が響いた。東大生は本当に時間の使い方が上手な人なんだと感じた。意外と「いろんな体験をすべきだ」など、勉強と少し違うところからも切り込んだ話を聞けてとても驚いた。明確な目標を早めに持つておいて、それに向かって行動するなど、どんな風に高校生活を過ごすかの参考になった。自分に向いていないと思うことでも、まずはやってみることが大切だと思った。

# マレーシア研修

1日目

▲アグロツアー（ゴムの木とヤシ油の木等の見学）

▲ハノイ経由で約12時間の移動ののちマレーシア到着

2日目

- ▲バトゥー洞窟（ヒンドゥー教の聖地）観光
- ▲アグロツアー（ゴムの木とヤシ油の木等の見学）
- ▲ホストファミリーと対面&テメロー村にて歓迎式



3日目

- ▲現地の学校（Sekolah Berasrama Penuh Integrasi）にて交流
- ▲エレファントサンクチュアリー（ゾウの保有地）にて餌やり体験
- ▲テメロー村にてさよならパーティー



4日目

- ▲マレーシア名産のスズ製品の工場見学
- ▲王宮・モスク・独立広場の見学
- ▲クアラルンプール市内観光



5日目

▲帰国



洞窟まで続く階段はとても長くカラフルで、登っていく最中たくさんの猿を見ることができました。

また、洞窟の中は前日の大雨のために上から水が降ってきており幻想的でした。ちなみにここでは、ヒンドゥー教徒がお祈りしている様子を拝見できます。



マンゴスチンとランブータンは口当たり滑らかで甘くておいしかったです！



### ●ホームステイについて

ホストファミリーはみなさん生徒に優しく、日本文化に理解がありました。一方で各家庭でマレーシア文化の様々な体験をさせていただきました。1日約4食でマレーシア独自のフルーツや料理を食べさせてもらいました。



またココナッツ割りをしたり夜のドライブで現地のコンビニや近くの川で写真を撮ったりもしました。家庭によって体験したことは様々ですが、各自素敵な時間をホストファミリーと過ごせました。



現地の学校は寄宿制で日本語マレーシア語中国語アラビア語、四か国語を勉強していました！

伝統的な踊りと音楽を見せてもらいました\*



間近で見るゾウの迫力は満点でエサを食べる姿はかわいかったです。

スズ工場では工程すべてを見ることができました！きれいなスズで作られた孔雀は見ごたえ抜群でした！(値段は2000万円でしたw)

### ●感想

日本とは違う宗教を重んじている国ならではの服装や食事の違いなどがあり、異文化に触れつつも楽しく過ごすことができました。一つの意味伝達方法である「英語を使うこと」の難しさに直面したと同時に、「伝える気持ち」が何よりも大切であるとわかりました。

約30名の生徒をマレーシアまで連れて行ってってくれた先生たち、温かく迎えてくれた現地の方々、この研修をバックアップしてくれた家族に感謝の気持ちを忘れずにこの経験を生かしていける人になりたいと思います。



# 探究活動

津高校では、全校生徒が3年間にわたって探究活動に取り組みます。研究テーマの設定から研究の進め方、実験・調査の方法まで生徒主体で研究を進めていきます。人文科学・社会科学・自然科学の分野を問わず、自分の知りたいことをとことん研究できます。

## 1年生

探究の基礎づくり(「リベラルアーツ」)、夏季フィールドワークや試行的な課題研究などをおして「探究」のための基礎的知識や技能を習得します。



## 2年生

1学年時に取り組んだ内容を基礎として、本格的に研究を進めていきます。大学の研究室や企業等を訪問するなど、より専門的な知識・技能を習得し、研究を深めていきます。そして、SSH児童・生徒研究発表会で研究成果を発表します。



## 3年生

研究成果を論文にまとめ、学会等で発表することをおして、高校卒業後の学びにつなげていきます。



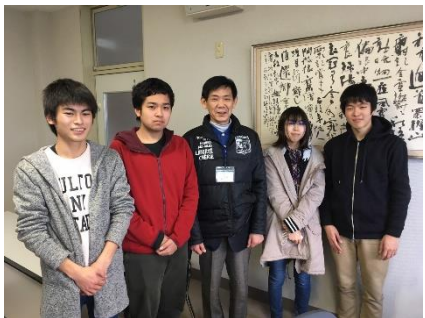
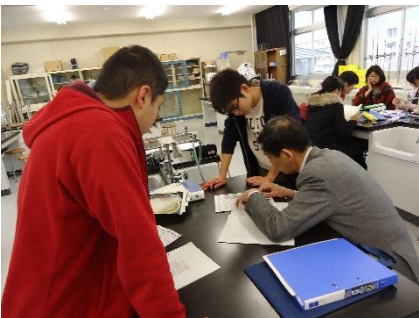
## 【とどまることを知らない】

### 3年 鎌田 健太郎 (創徳中学校)

私は、他のSSC(スーパーサイエンスクラブ)化学部会の部員3人とともに「温泉水で食品は美味しくなるのか」というテーマのもと、その秘密に迫りました。

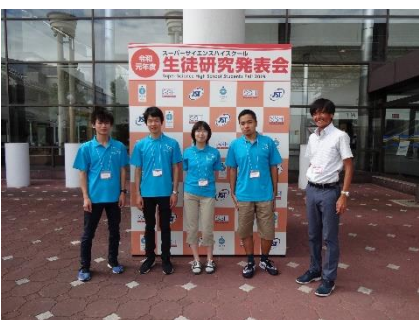
最初はどの進め方がいけばいいのかわからず、まさに手探り状態の日々でした。しかし、徐々に温泉水と食品の柔らかさとの関係に気づき、温泉水を使ったほうが美味しいと感じる人が多いことが明らかになると、その結果や発見に魅了されると同時に「なぜそうなるのか」「他の場合だとどうなのか」など新たな不思議がどんどん増え、今でも尽きることはありません。また、研究中は大学教授からヒントを頂いたり、地元の温泉観光に携わる方々と交流したりと新しい出会いがあったことも、今となっては貴重な経験となりました。

単なる思いつきを解決するために、様々な視点から研究を行い、多くの方々の協力を得て、県内、さらには全国の研究発表会でその成果を共有することができました。身近な疑問でここまで熱心に取り組めた自身にも驚きですが、探究活動を通じて知ることができた考え、技術、楽しさは今後の大学生活においても大いに役立つものだと確信しました。



「温泉水で食品は美味しくなるのか」

- ・みえ科学探究フォーラム 2018(2/16) 優秀賞
- ・令和元年度 スーパーサイエンスハイスクール 生徒研究発表会(8/7,8) 出場



津高校は文部科学省より科学技術・理科・数学教育を重点的に行う学校「スーパーサイエンスハイスクール (SSH)」の指定を受け、将来、国際的に活躍する科学技術系人材を育成するための取組や、大学・企業等と連携した教育を推進しています。



# 津高キャリアプロジェクト「西村ゼミ」

三重大学副学長・西村訓弘先生の指導のもと、「三重県の活性化」「起業家マインド」などをコンセプトに、「若者が自分の夢を叶えることができる場所として三重県を選ぶようになるためにはどのような施策が必要か」をゼミ形式で討論し考えをまとめ、班別に提案するという活動をしています。

第9回となる今年度は、「三重で会社を創ろう」というテーマのもと、12名のゼミ参加希望者が3班に分かれ、「三重県にあるものを活用しながら、どのように地域を活性化できるか」ということについて考えました。それぞれの班が独自のアイデアでどのような会社を起業できるかを考えていく過程で、様々な問題・課題が浮き彫りとなりましたが、班内で意見を出し合い、ゼミでの討論や西村先生からの助言を経て、起業案を形にしていけることができました。今回西村ゼミで取り組んだ内容は、鈴木英敬三重県知事に発表予定です。

## 【各班のテーマ】

### 1班「Flower and Wedding」

三重県の自然豊かな景色を生かしたフォトウェディングをプランする会社。地元の観光地やホテル等とも提携し、日本全国や海外からも集客することで三重県の活性化を目指す。

### 2班「尾鷲市で大豆作り」

尾鷲市の耕作放棄地や空き家を活用して大豆を栽培し、大豆の国内自給率を上げるとともに、大豆を使った製品を開発する。

### 3班「移動販売員の働き方改革で買い物難民を無くそう」

三重県の過疎地域における移動販売の現状改善を目標に、仕入れ負担軽減サービスや情報共有制度等の導入によって移動販売を支える会社。

## 【参加生徒の感想】

- ・三重県の魅力や三重県でがんばっている人について知れて良かったです。課題を見つけそれに対して何ができるのか考え、さらに良くしていく、という力はこれからも大事にしていきます。
- ・全ての発表の時、細かい点から大きな話に広げてでも最終的に最初に話した細かい点に結論が戻ってくるという展開に、毎回ひきこまれている自分がいました。本当に自分の人生の役に立つゼミで、深く心に残りました。
- ・物事に対する姿勢や見方を学んだだけでなく、同じ班になった同じ学年の人と仲良くなるなど、人の輪も広がりました。
- ・探究の一つ上に行くようなプロジェクトで、三重県について考えることができたこともあって、参加して非常に良かったです。
- ・今後も社会で起きていることに目を向け、自分なりに考え、考えたことに満足せず、また情報を入れて・・・と成長し続けていきたい。
- ・この活動を通して、一つのことについて考え抜き、たくさんの方々に意見も出してもらい、より良いものを作り上げる大変さと楽しさを感じることができました。日常生活の中でも常に学び続けていく姿勢を大切にしていきます。
- ・班員と試行錯誤して企業像を作り上げる事がとても楽しかった。
- ・西村ゼミに参加したことで、知らない世界の事を知る楽しさや、諦めずに物事に取り組む事の大切さを学ぶことができました。





# インターハイ(少林寺拳法)に出場して

樋口健世(豊里中)

私は、2019年の夏、全国高等学校総合体育大会少林寺拳法競技(8月2,3,4日)に出場しました。私にとってインターハイは初めての全国大会でした。中学1年生の時に少林寺拳法を始めました。中学生の時から少林寺拳法がインターハイの競技であることを知っており、出場したいと思っていました。

1年生の時は三重県予選で敗退し出場できませんでした。しかし、どうしても出場したいという思いがあったので、必死に稽古を重ねました。そして2年生なって二度目の三重県予選に臨みました。出場したいという思いが強かった分自分の出番が来るまでこれまでに感じたことのないくらいの緊張を感じました。今でも緊張しそうな場面に立った時、このときの緊張を思い出すと「こんな緊張どうってことない」と思えます。出番が来ました。私は、演武時間1分13秒に自分の出来る限りをぶつけました。その結果、1位で予選を突破できました。予選から2か月稽古を重ね本選に臨みました。三重県1位ということもあり少しは通用すると思っていましたが、実際は全く歯が立ちませんでした。悔しさもありましたが、同時に今回インターハイに出場したことが自信になりました。

今(2020年2月現在)は、3月にある全国高等学校少林寺拳法選抜大会の本選に向けて稽古をしています。

## 令和元年度 全国高校総体少林寺拳法競技大会



令和元年8月2日～4日 会場: KIRISHIMAツツブキ武道館

# 「私のなぎなた人生を変えた一年」

## 船木真琴（西橋内中学校）

私は津高校を受験すると決めた時に断念したことがあります。それは小さな頃からなぎなたを続けてきた私にとっては大きな決断でした。なぎなた部に入り、インターハイに出ること。高校では高体連に加盟しないと大会に出ることが出来ず、ましてや同じ高校にペアがないと演技競技には出場できないのです。

なので、今、これは“運命”だと思っています。

津高校に入学し、今のペア、長谷川歩希ちゃんと出逢えました。まさか高校で演技ペアが組めるとは思ってもみませんでした。

初の県総体では演技競技3位、あと一步でインターハイ出場でしたが東海総体に出場、団体選考会では最後まで残ることが出来ました。

でも、なんといっても、この一年で一番嬉しかった賞は、1月12日、新人戦で演技競技優勝、団体戦3位になれたことです。団体戦ではなぎなた経験もなかった友達の市川史乃ちゃんが一緒に出てくれました。

私は、本当に、いい友人たちに、この津高で、出逢えたと思います。感謝の気持ちでいっぱいです。

これからも勉強となぎなたを両立しながら、頑張ります。2年生では絶対にインターハイ、国体に出場します。なぎなたを自分らしく全力で楽しんでいきたいです。

## 長谷川 歩希（高田中学校）

私たちは三重県高等学校総合体育大会兼全国・東海高等学校総合体育大会予選なぎなた大会の演技の部で3位をとり、東海大会に出場、第28回三重県高等学校新なぎなた大会兼第15回全国高等学校選抜なぎなた大会予選会の演技の部で優勝、団体の部で3位をとりました。

なぎなたの演技では、相手との呼吸が大切になってきます。

練習場所の時間もあまりなく、限られていた中で先生に教えていただきながら何度も練習しました。

本番では少し緊張していましたが、高校生になってまさか一緒に演技の試合に出られる友だちが出来ると思っていなかったのが、緊張よりも楽しい気持ちの方が大きかったです。

今年は夏の大会で東海大会までしか行けなかったのが、次の大会では演技、個人、団体のそれぞれで結果を残すために、1回1回の練習を大事にして力をつけたいと思います。



## 山下実沙稀

## (西郊中学校)

私は小学六年生からボウリングを習い始めて、今年で五年になります。始めて数年はほとんど大会に出ていませんでしたが、中学二年生の時に三重県ジュニア選手権大会で女子の部優勝、総合二位になることができました。それから毎年全国大会に出場しています。

中学三年生の時に東海ブロック大会を通過し愛媛国体出場、高校一年生の時には三重県春季ジュニア競技大会四位、三重県ジュニア選手権大会女子の部二位、東海北信越高等学校選手権大会二人チーム三位、そして今年は三重県ジュニア選手権大会女子の部優勝、総合五位、三重県冬季ジュニア競技大会二位になることができました。そして冬季の大会では自己ベストを更新することができ、なかなか練習できない中本番で力を出し切れたのはとても嬉しかったです。今年も夏に開催される全国大会に出場できるよう、頑張ってお立したいと思います。全国大会ではいつも良い結果が残せていないので、少しでも良い結果が残せるように質のいい練習をして挑みたいと思います。中学二年生から目標にしていた茨城国体出場の夢を諦めることになってしまったのはとても悔しいけれどその分勉強にもしっかり取り組みたいです。

ボウリングを始めて良かったなと特に思ったのはいろいろな人との関わりが増えたことです。全国大会に出ることで出来た他県の友達は日本代表として頑張っていたり、プロを目指していたり、とても刺激を受けています。大学生になっても色々な大会に出られるので、友達と切磋琢磨しながら頑張りたいと思います。

まだまだスポーツとしてのボウリングはあまり知られていないと思うので、結果を残してたくさんの人に知ってもらえると嬉しいです。





# 「健康に関する作文」

1 1月に行われた第45回「健康に関する作文」コンテスト（三重県学校保健会主催）において、下記の生徒が受賞しました。

- 最優秀賞 1年 川戸 愛花（緑ヶ丘中学校）
- 佳作 2年 菊池 英心（西橋内中学校）
- 佳作 2年 姫野 晴聖（みさとの丘学園中学校）

## 『心と身体』 最優秀賞 1年 川戸 愛花（緑ヶ丘中学校）

健康とは何だろうと考えた時、私が一番に思うことは心も身体も元気な状態であるということだ。世界保健機関でも、健康とは、『身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態であり、たんに病気あるいは虚弱でないことではない。』と定義されており心も健康においてとても重要であることが分かる。私が心の健康も大切だと思うようになったのは中学校三年生の時である。

私は小学校三年生の時から自分の成績を気にするようになり、中学校に入学してからより気にするようになった。そして、努力し続けることをあきらめなかったということもありテストや成績などで良い結果を残すことができた。私は昔から負けず嫌いで成績や順位を落とすのが嫌だった。それに加え家族や塾の先生、学校の先生から沢山の期待の言葉が掛けられた。それが当時の私にとって大きなプレッシャーとなっていた。そしていつしか自分の将来のために頑張っていたはずの勉強が、良い結果を残すためへと目的が変わっていったのである。そう思うようになってから定期テストや模試の前になるとすごく緊張するようになった。ひどい時は緊張で腹痛になったり急に熱が出たりした。この時に初めて心と身体は連動していることに気がついた。今考えてみると、心が緊張している状態になると生活の質が下がり免疫が低下しているためそうなったのだろう。

この経験から私は心の健康がどれほど大切かが分かった。しかし、私が以前経験したように身体的な健康問題がはっきりとあらわれていなくても心の健康問題をかかえている人は多くいる。心が常に疲れている状態にいると人として生きるのに活気がなく楽しむという感覚を忘れてしまう。そういうふうな生活を送っているといつか必ず身体的な影響があらわれるだろう。

では、そのようにならないためにできることは何だろうか。方法はいくつでもある。私が思う方法は一つある。それは趣味を見つけるということだ。私は歌を聞いたり歌うのがずっと好きで中学三年生の夏にアコースティックギターを始めた。アコギを弾いて歌っている時間は何もかもを忘れ、リフレッシュすることができた。趣味というのはとても幅が広いものでギターのように行動するものからアイドルなどを応援するというものまで様々である。しかし、共通していることが一つある。それは、没頭できるということだ。趣味に没頭している時間は自分の嫌なことから脱することができると共にこれから自分が頑張れる活力を手に入れることができる。これはストレスを溜めないというよりは、ストレスを上手に発散する方法と言えるだろう。ストレスを溜めないというのは現代の社会を生きる人にとっては難しいことであると私は思う。だから、ストレスを定期的に上手に発散できる方法を取得したい。

ここまで私は、主に精神的な健康について述べてきたが、身体的な健康についても大切だと思ったことがある。それは、受検が近づいてきた頃である。私は外出する時は常にマスクをつけ、家に帰ってきた時は念入りに手洗いうがいをしていた。そしてインフルエンザのワクチンを二回打った。そのおかげか大きな感染症にかかることがなかった。また、マスクや手洗いうがいのような基本的なことこそが大切なことだと分かった。学生の間は学期の初めに健康診断があるが社会人になってからは減る。だから定期的に人間ドックに行き、体のメンテナンスを行う必要がある。自分の健康は自分で管理する力を身につけていきたい。

このように、心の健康や身体はどちらも自分で管理することができる。しかし、個人だけでは上手くいかないこともある。例えば、自分がいる環境が一部の人だけ得するようではストレスが溜まってしまう。その環境を変えるのはその環境にいる人たちだ。医療機関の充実や保険サービスなど自分たちの力ではどうにもできないことがある一方で、できることは探せばいくらでも出てくる。自らの健康だけでなく、自分の周りの人たちの健康も考えられる人たちが増えることを心から願っている。そして考えるだけでとどまらずにぜひ行動に移してほしい。それが誰かの健康を守るための大切な一歩になるかもしれない。

## 第65回青少年読書感想文全国コンクール



全国審査 全国学校図書館協議会長賞  
(三重県審査 最優秀賞)

「人を信じることの難しさをのり越えて」

2年5組 島 裕乃(南が丘中学校)

(対象図書:『ヒマラヤに学校をつくる カネなしコ  
ネなしの僕と、見捨てられた子どもたちの挑戦』吉岡  
大祐著 旬報社)

この世の中に無償の優しさはあると信じられる人はどれくらい存在するのだろうか。誰かに優しくされたときに、何か裏があるのではないかと不安になってしまうことはないだろうか。私は高校に進学し様々な人と出会った。人間は大人になるにつれて自分を偽ることが上手になる。そして誰もが交差する人の思惑に振り回されることに慣れてしまっている。そう私は感じた。だからこそ、誰かの善意を素直に受け止めること、誰かを信じること、誰かに無条件に優しくなることに億劫になってしまっている。本書はそんな人に読んで欲しい一冊だと思う。

この本の筆者である吉岡大祐さんは渡米を夢見ていたが、ネパール人の知り合いの一言でネパールに渡る。そこでは極度の男尊女卑の考え方や、ヒンドゥー教古来の考え方により耐えがたい差別を受ける女性や障がいを持った人たちがいた。その上名目上、カースト制度は廃止されたはずなのに、根強く残る下位カースト層の人に向けた差別。それ以前に日本よりもはるかに貧しい生活を強いられる国民たち。その光景を目にして筆者は言葉を失ったという。当初鍼灸師としてネパールの人々と交流を持った筆者であったが、無償で治療してくれる筆者のもとにはたくさんの方が集まった。鍼灸では治せない大病を患った人までもが山を越えやってくるのだ。その理由は、体が痛くても病院に行くお金がないから。こんな状況下ゆえに教育を欲しても学校には行けず生活費を稼ぐために小さな体を酷使し労働する子供たちを見て、筆者はネパールに貧しい子供たちの教育の場を作ることを決意するのだ。

筆者の活動を記録したこの本の中には多くのネパールの子供たちが登場するが、私の印象に残っているのはゴビンダという少年である。彼の父親は出稼ぎに行った先で半身まひになり、母親は義父の暴力によって盲目になっている。両親の代わりに働くゴビンダに筆者は字を教えた。そのときに彼は言う。

「字をたくさん覚えたら、お母さんの目が見えるようになる？」  
この言葉が私の脳裏にこびりついて離れない。こんな究極の貧困下で純真に相手を思いやれる人がいるのだと、自分も苦しいはずなのに暖かな言葉をかけられる人がいるのだと知った。これが無償の優しさなのかと思った。基本的に人間は自分の欲求が満たされるように、利益になるように動いてしまうことが多いと思っていた。それは決して悪いことではない。自分の環境をより良くしようとするのは当然のことだと思う。そのために行う努力は美しいとさえ思う。しかし、だからこそ冒頭に述べたように誰かの行動が、行っている人の利益に関係なく、ただただ優しい思いで出来ているとは思えなくなっていた。私は全ての親切心を疑ってかかっていた。本書にはネパールの子供たちのために学校づくりに奔走する筆者をはじめとして、限りある自分の時間と資金を捧げる人がたくさん存在した。筆者が立ち止まってしまうたびにそっと背中を押すクラーク記念ヒマラヤ小学校の初代校長のヤグギャ先生、ネパールの状況を知り、力になろうとした日本の高校生たち。学校設立の募金に協力した人々、たった一人の「教育の場を整えてあげたい」と思う気持ちが数えきれない人の優しさ、情熱で形になっていく。彼らの中に自分の利益を第一に考えている人がいたのだろうか。いや、きっといなかったと思うのだ。

筆者が作り上げたのは決して学校だけではないと私は思う。本の後半に綺麗な制服に身を包みこぼれんばかりの笑顔の子供たちが写真に収められていた。それが全ての答えだと思う。筆者は子供たちの希望と笑顔を作り上げたのではないだろうか。

決して学校完成がゴールではない。少ない資金で学校運営をしなければならない。数多くの問題を解決する前に亡くなってしまった子供たちもいた。先の見えない道を筆者は二



○年間走り続けた。そして筆者は言う。

「人に恵まれた二〇年。」

この言葉が出てくる人柄ゆえに多くの人々が彼についていったのだろうと思う。そして彼はその人たちを信頼し仕事を任せ偉業を成し遂げた。

大きなことを成し遂げる人はとても美しい。しかし、人のことを信じられる人はもっと美しいと思う。いつも疑心暗鬼になっていた私の貧しい心は本書によって随分と潤った。疑うことは簡単だが信じることは、疑う以上に大きな奇跡を作り出す。本書ではその奇跡が学校であり子供たちの笑顔であったのだと思う。だから私は今の私の精一杯の優しさを誰かを想って表現してみようと思った。そして人を信じられるようになるために私自身が人に信じてもらえる人になることを誓う。その行動がいつしか忘れたころに小さな奇跡となってやってくるよう信じて。

## 全国審査 サントリー奨励賞（三重県審査 最優秀賞）

### 「ここだけが世界ではない」

2年7組 小田 高弘（久居東中学校）

（対象図書：『旅をする木』星野道夫著 文藝春秋）

まぶたを閉じると、一瞬にしてアラスカの白銀の世界が広がる。カリブーの息遣いを近くに感じる。夜には無数の星たち。星野さんと一緒に旅をしている気持ちになった。

私は、田畑が広がるのどかな田舎に住んでいる。豊かな自然に囲まれた地域であるが、野生の自然ではない。人のために整備された人が住みやすい自然なのだ。また、温暖な気候のため雪も滅多に降らず、北国への憧れは大きい。「ヨーロッパの人びとがアラスカに魅かれるのは、本当の野生の自然を求めるからだ」と作中にあったが、おそらく今、私の気持ちがアラスカへ飛んでいるのも、同じ理由かもしれない。しかし、野生の自然は、命のやり取りが当たり前に行われている世界である。生半可な憧れで足を踏み入れることができる場所ではない。だから尚更、人間のためでも誰のためでもなく、それ自身の存在のために息づく自然の気配に触れたいと願うのだろう。

星野さんは、極寒の中で生きる動物たちの営みに、生命のもつ強さを感じるという。自然はいつも、強さの裏に脆さを秘めている。魅かれるのは、自然や生命のもつその脆さの方なのだ。確かに、生命の強さと脆さを感じることは少なくない。強さと脆さは、紙一重なのだと思う。生きるということは、この強さと脆さの間を絶え間なく行き来することなのかもしれない。

「新しい旅」の章で、星野さんがアラスカへ旅立った時の回想がある。「目の前からスーッとこれまでの地図が消え、磁石も羅針盤も見つからず、とにかく船だけは出さなければというあの頃の突き動かされるような熱い想いです。そしてたどり着くべき港さえわからない新しい旅です。もしかすると、誰の人生もさまざまな意味でそういうことなのかもしれませんね。」語り口はとても優しい。しかし、「突き動かされるような熱い想いが君にはあるか」と、真っ直ぐな眼差しで問われている気がした。あたかも目の前に星野さんがいて、嘘偽りない本音をさらけ出さなければいけないような緊張感を強く感じたのだ。

また、「十六歳のとき」の章では、自分の経験値が圧倒的に低いことを痛感した。星野さんが十六歳でアメリカを旅した後、こう語っている。「ぼくは現実の世界を生きていたわけではなかった。旅を終えて帰国すると、そこには日本の高校生としての元の日常が待っていた。しかし、世界の広さを知ったことは、自分を解放し、気持ちをホッとさせた。ぼくたちが暮らしているここだけが世界ではない。」こんな経験を自らの意志でやり遂げたこと、そして、今の自分との気概の大差に打ちのめされた。「ここだけが世界ではない」という言葉が胸を打つ。頭の中でリフレインする。

日常の鬱々とした悩みや苦しみは、とても小さな営みの中で、出口を探してさまよっている。しかし、熱い想いを持ってその小さな輪の中から一步踏み出せば、違う世界が開けているのだ。これを知り得た今、心も体も軽くなった。これはとても意義があることだ。

世界は広く、人間は不可思議で、自然は厳しく美しいことを、知識としてはある。しかし、どれほどの実体験や、あるいは本質的なものが私の中にあるだろう。例えば、星野さんとコロンビア人のネイチャー・カメラマンのアルドウとの出会い。アルドウと共に旅を

し、お互いのバックグラウンドを語らううちに、星野さんは彼の素朴で一途な人間性に魅かれていく。このことが南アメリカに少し距離を感じていた星野さんの心をグッと引き寄せたのだ。「人と出会い、その人間を好きになればなるほど、風景は広がりと深さをもってきます。やはり世界は無限の広がりを含んでいると思いたいものです。」と星野さんは語る。ものの見方は、その人その人の立場による。だから、人との関わり合いは難しい面が多い。気の合う人や、考え方を同じくする人と接する時間が多くなりがちだ。しかし、たくさんの人々との出会いは、新しい出来事を展開させる。そして、その新たな展開の先には、全く違う体験が待っているということを教えられた。これからは、様々な人との関わりを躊躇せず、相手を尊重し、出会いを大切にしていきたいと思う。幸いにも、私の学校には個性豊かな先生や生徒が多い。自ら行動し、今まで関わってこなかった人と語り、内面を掘り下げるべきだと感じた。

実体験の乏しさや、本質的に物事を理解していないという視野の狭さが、自分を臆病にしている。しかしその脆さを、強さに変えたいと思う。星野さんのように、既存の枠にとらわれず、自分の限界を決めず、広い視野で物事と向き合おう。そうすれば、脆さは強さとなり、強さは熱い想いとなるだろう。そしてその時、新しい一步を踏み出してみよう。ここだけが世界ではないのだから。

### 三重県審査 優秀賞

#### 「良いもの」探し

#### 2年1組 勝井 七海（南が丘中学校）

（対象図書：『ラインマーカーズ：The Best Of Homura Hiroshi』穂村弘著 小学館）

明け方に降る雪。おいしいクッキー。ふわふわのファー付きコート。夜の散歩。このようなものに対して、私たちはどんな印象を抱くだろう。恐らく大半は「ちょっとした良いもの」「なくても死なないけどないとばさつくもの」といったところだと思う。というかそれ以外にはほとんどないのではないか。

今は「良いもの」の画一化の時代だと思う。SNSによって流布される、簡素で大衆迎合的な情報。私たちがそれをいいね！とよくないね！に振りわけるのに、深く考える余裕はない。受信するものも、目に留まるものも、気づいたら皆同じようなものばかりだ。

さらに、「良いもの」は本来は自力で見つけ出すものという姿と離れて、選り取るもの、になってきている。例えば青空は、その時にしかない青さをその時の気分で見上げるものだけれど、今や手の中に何億もの空がある状態なのだ。後は選ぶか選ばないかの問題である。要するに、「あっこれ良いな」という気持ちの動きに対して受動的なのだと思う。

私もまさにそうだった。毎日大量の情報にさらされに行き、自分の意思やら感受性やらをわざと置き去りにするような感覚があった。それはとても空しい一方で、楽だし、どこもない安心感もあった。

だから、はじめて穂村弘歌集『ラインマーカーズ』を手にとった時、とてつもない衝撃を受けた。見たこともない世界。気にも留めたことのない些細なことが克明に描かれ、きらきらしている。「ちょっとした良いもの」たちが「なくても死なないとか言うな」と迫ってくる。口語短歌の存在は習っていたのに、あはれあはれが短歌の全てじゃないと知っていたのに、すべてが新しい。そして薄ぼんやりと、ああ、なんか、人生変わっちゃいそうな感じ、と思った

例えば『明け方に雪そっくりな虫が降り誰にも区別がつかないのです』。そんな、今まで見てきた白いふわふわ、あれが虫だなんて。世界が反転する。それから『忘れたいことを忘れろアルファベットクッキー池のアヒルに投げて』。クッキーはおいしいだけのものじゃないんだ。ふわふわコートは『革コートの襟の毛皮に鼻埋めて（じゅうごねんまえころされたうさぎ）』だし、散歩じゃなくて『アトミック・ボムの爆心地点にてはだかで石鹸剥いている夜』。怖い歌も、甘やかな歌もあった。意味の解らない歌も。それらを、軽快な七五調にのって咀嚼するのは、とても楽しかった。つい無個性を選んでしまう私が消えていく。何でも知ってるような顔をしたSNSは、実は排他的で一面的な世界の一端に過ぎなかったのだ。

これと決めた歌をじっくり解き明かすのも楽しかった。例えば『校庭の地ならし用の口

ローラーに座れば世界中が夕焼け』。一瞬で大空いっぱいのオレンジと無垢な少年の眼差しが浮かぶノスタルジックな歌だ。にしても、世界中が夕焼けなんてやけに壮大な例え。地球の半分はいつも夜だし、雨も降るのに。でも説得力がある。私は、この説得力を支えているのは全能感であると捉えた。大きくて重いローラーは、何でも消せる。足跡も水たまりも相合傘の落書きも、通った順から消していく。そのローラーに座ってまっさらな校庭を見ると、孤独で全能な神様の心地がするのだろうかと思うのだ。だから少年を中心として塗り直されていく空というのは、決して大げさな描写に思えない。……こんなふうに。

もともと、穂村さんの著書『世界中が夕焼け』によると、この読みは少し作意とずれているらしい。でもそれが短歌の醍醐味でもある。一般に、短歌は詠み手以上に読み手のものであると言われている。内容より、それをふまえて何を考えたかが大事。作意とずれがあってもそれはニュアンスの広がりとして受け止められるのだ。あえて情報を少量に留め、様々な解釈を生み出す土壌とする、自由さ。私が最初に感じていた新しさというのは、この斬新な自由さのことだったのかもしれない。

形式でいえば、短文で主張ができる短歌はSNSの文章や写真とも似ている。しかし実情は正反対だ。大勢に受け入れられることのみを念頭に置いた文章には、余白がない。拡大解釈を許さない。そしていかなる反論も認めない。だからこそ、私は余白だらけのこの本『ラインマーカーズ』を、ひいては短歌を、信じたいと思う。これを信じる他に、この画一化されていく自分に対抗する術はないんじゃないかという気さえする。この本を知る前は短歌についてほとんど興味がなかったのに、だ。それほど、この本で描かれる「良いもの」たちは、それこそ白黒のノートにひかれた一本のラインマーカーのように、鮮烈で、自分でも探さずにはいられなくなるほど、きらきらしていたのだ。

---

### 三重県審査 優秀賞 生きるとは

2年3組 魚住 るり（西橋内中学校）

（『夜と霧』ヴィクトール・E. フランクル著 池田香代子 みすず書房）

私はしばしば考えるようになったことがある。それは「何のために生きるのか」ということだ。それを強く意識するのは、たいてい他人に必要とされない無力な自分を感じたときである。果たして私には生きる価値があるのだろうか、あるとしたらどこにあるのだろうか、という問いは私を苦しめる。なぜなら分からないからだ。いくら考えても答えが見つからないのだ。まず、他人に必要とされないことで自分が価値を失うのだとしたら、人のために生きる人のための自分であるのか、と自問する。違うはずだ、と思う。ただ、自分のための自分なのか、と問うても、そうだと断言できる訳でもない。人のためか、自分のためか、あるいは他の何かのためか、何のために生きるのかと悩み続けてきた。そんなときに出会ったのが、「もういいかげん、生きることの意味を問うことをやめ、わたしたち自身が問いの前に立っていることを思い知るべきなのだ」という本書中の一文だった。全くの新しい考えだった。しかし、妙に腑に落ちる言葉だった。これは、ナチスドイツの強制収容所内で過酷な生活を生きのびた著者の言葉であり、私のような者が容易に理解できる言葉ではないだろう。しかしこんなにも心に溶け込むのは、先ほどの問いが不毛であることをどこかで悟っていたからであろう。答えはいつか誰かから、何かから与えられると甘えて過ごしてきたが、私自身こそが答えを導く存在だったのだ。著者はまた、「考えこんだり言辞を弄することによってではなく、ひとえに行動によって、適切な態度によって、正しい答えは出される」と言う。考えこんでいた私にとって、反省を促す言葉であった。自ら動き、答えを探し求めない限り、答えは見つからないのであろう。私は、「生きていること自体に価値がある」という考えが好きではない。それは答えが見つからない人間が、またはその人間に対して出す投げやりな答えのように思えるからだ。なぜ価値があるのか、と問うても、「価値があるからだ」という見当違いな答えしか得られない。人間は「何のため」を具体的に求めたがるものだと思う。そしてまた、他人ではなく「自分が」生きる価値を求めるものだと思う。日々の行動が答えに直結していないように思えても、ある行動がきっかけで新しい世界が見つかるかもしれない。それまで、徹底的に行動して具体的な答えを求めるべきだろう。著者が自殺を止めた男も、「仕事のために」「待っている子供のために」という具体的な答えを持ち直して生きのびたという。

著者はドストエフスキーの言葉を引用している。「わたしが恐れるのはただひとつ、わた



しがわたしの苦悩に値しない人間になることだ」というものだ。この言葉の解釈には苦しんだ。人間は苦しみにぶつかったとき、それを解決するために、考え行動する。「苦悩に値しない」というのは、苦しみを切り抜けようと、考え行動できなくなったときだろうか。苦悩は内面的に人間を成長させるものである。しかし、その苦悩から目をそらし、投げやりになったとき、苦悩はただの苦悩となる。成長も何ももたらしはしない。それをドストエフスキーは恐れているのだと考えた。著者は苦しみに対して次のように考えた。「わたしたちを取り巻くこのすべての苦しみや死」が「無意味だとしたら、収容所を生きしのぐことに意味などない」と。ドストエフスキーの言葉と重なった。そして著者はまた、収容所の過酷な状況下でも、「人間としての最後の自由は奪えない」という。最後の自由とは精神の自由である。人間はどのような状況下であっても、どのような精神的存在になるかを決断できるという。これらの著者の考えとドストエフスキーの言葉から、苦悩に対するふさわしいあり方を少しばかり見つけられたように思う。私は苦悩に対面すると、すぐ弱気になり諦めようとする傾向があった。全く苦悩に値していなかったのだ。しかし、弱気になる必要はなかった。どんな厳しい苦悩でも、私は全くの自由であり、その苦悩を意味あるものにするかどうか自由で決断を下せるのだ。そして苦悩こそが生きる意味に導いてくれるのではないだろうか。幸福で仕方がないときに、人間は生きる意味を探し求めるだろうか。苦悩に対面しても、目をそらさずに適切に行動し続ける。「苦悩に値」する人間となる。最初の問いの答えを導こうと努力する。そうしたとき、私という人間は価値あるものになる。生きる意味を探し求めて生きることこそが、生きるにふさわしいあり方であるのかもしれない。

# 諸戸渚沙（三重大附属中学校）

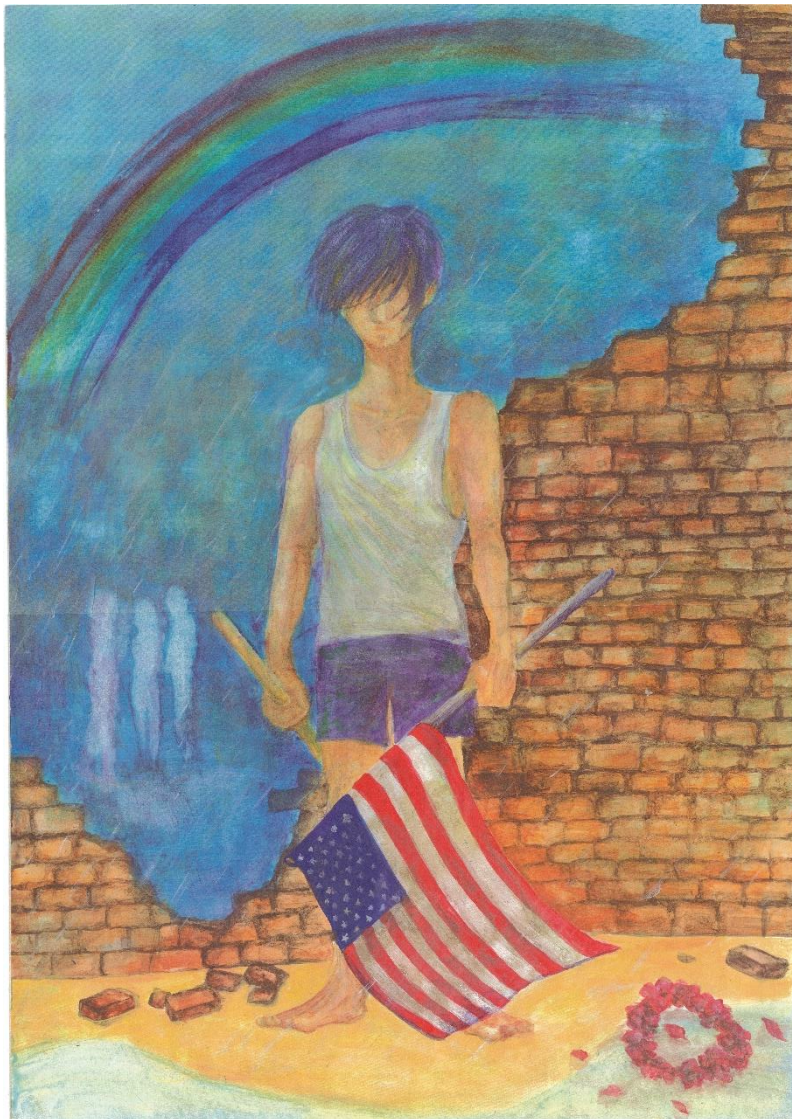
第 31 回読書感想画三重県コンクール  
最優秀賞

## 「ぼく」は「ぼく」

（『マレスケの虹』

森川成美著 小峰書店）

まずこの本を読んで主人公たちは日本人の血筋でありながら、アメリカの市民であることで、両方の国から疎外されるという現実を何とかしよう（壁を壊そう）としているのが一番印象に残りました。そして「ノーレイン・ノーレインボウ」というハワイのことわざもキーワードになっていると感じました。それらを一枚の絵にまとめあげるのはなかなか悩みましたが上手くいったと思います。



矢田 陸人

(鈴鹿市立大木中学校)

第 31 回 読書感想画 三重県コンクール  
高等学校指定読書 最優秀賞 (令和 2 年 1 月 15 日)  
※表彰式は令和 2 年 2 月 20 日

僕は中学 2 年生の時に読書感想画コンクールに自由読書で応募したことがあります。今回、また読書感想画を描く機会があったので、「今度は指定読書に挑戦してみよう」と思い、応募することにしました。

(作品について)

「南西の風やや強く」

この本の主人公は初め親が言うとおりに、親に決められた道に進もうとしていました。しかし、ある時 1 人のクラスメイトと神社で偶然会ってから、少しずつ変わっていきました。

僕が一番印象に残ったこの場面を黒色のインクを使用して版画で表現しました。

絵全体が暗くなりすぎないように水彩絵の具で色を付けながらも版画本来の良さも消してしまわないようにするのが大変でした。

僕も小さい頃から、この本の主人公のように誰かに勧められたことに従ってしまったり、決められた道を選んでしまったりすることを何度も経験してきたので、主人公と自分とを重ね合わせながらこの絵を描きました。

誰に何を言われても、自分が本当にしたいことを貫き通せるような強い心を持った人になりたいと思います。





# 東海総体に出場して

## 三年 川戸洋平(久居中学校)

私は、2019年6月22、23日に静岡県三ヶ日青年の家で開催された、セーリングの東海総体に、ラジアル級で出場しました。そして、一年生の太田タケル君とともに学校対抗で三位入賞しました。

セーリングとは、海や湖で、主に一人又は二人でヨットを操作するスポーツです。海上に設置されたマークを、一斉にスタートして正しく回航した順位を競います。レースは自然環境に大きく左右されます。選手は艇全体のバランスをコントロールしながら、刻々と変化する様々な条件を予測して、抜きつ抜かれつの攻防を繰り広げます。聞きなれない方も多いと思いますが、伝統あるスポーツで、東京オリンピックでは、江ノ島で10種目が行われます。

私は、小学5年生からセーリングをしていて、自分でヨットを操り、自然の中で帆走する感覚が楽しくて、艇種を変えながら続けてきました。今回の大会は、高校生で最後の大会でした。自分が教わってきたことと今までの練習の成果を発揮しようと心に決めて、大会に臨みました。初日、二日目ともに弱い風が続いたので、失速しないように艇を帆走させることと、自分の小さなミスをなくすことを意識しました。レース中は、一つでも良い順位を取れるように、ゴールまで集中して帆走しました。個人の総合では7位で、悔しい結果となりましたが、最後まで諦めずにレースに取り組めたことは良かったです。

また、津ヨットハーバーで一緒に練習してきた太田君と団体で結果が出たことは嬉しかったですし、学校の選手として大会に出場することは初めてで自分が津高校の一員だということ意識しました。協会主催の大会とは違った東海大会の独特な雰囲気を感じることも出来ました。また、今まで他の大会で競ってきた選手たちとともに、高校最後に東海大会に出場し、セーリングをできたことは良かったと思います。この経験を今後の自分の成長につなげていきたいと思っています。

今回は出場にあたって、教頭先生をはじめとして多くの方に協力していただきました。学校でも多くの方に応援していただき嬉しかったです。ありがとうございました。

